多胎児家庭の育児に関するアンケート調査

分析結果報告書

石川県立看護大学健康科学講座
大木　秀一

はじめに

現在、年間に出産する母親のおよそ 100 人に 1 人が多胎児の母親になっています。多胎の妊娠や育児が一般よりも大変であることは、実感ではわかっていてもなかなか数字として表れてきません。多胎育児に対して行政機関や医療機関の理解を深めて支援を広げていくには、まず実態を示すことが必要ですので、このアンケート調査を実施いたしました。

このアンケートは、大木が代表をしている「いしかわ多胎ネット」（2012 年 2 月に NPO 法人となりました）で、独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業の 2009 年度特別助成金を受け多胎育児支援の充実と普及啓発活動事業の一環として 2010 年 1 月に実施しました。それに引き続き、ツインマザースクラブをはじめ全国の多胎育児サークルの協力を得て調査を進め、数多くの多胎児家庭の皆様にアンケートへのご参加をいただきました。自由記述の質問にも、多くの方が丁寧に体験に基づいた様々なご意見・ご感想を記載してくださり、貴重な情報を得ることができました。少し量の多い、面倒な質問にも関わらず皆様にご協力いただきまして、ありがとうございました。ここに分析結果をご報告させていただきます。地域における今後の多胎育児支援の参考になれば幸いです。

2013 年 2 月

大木　秀一

〒929-1210　石川県かほく市学園台 1-1
石川県立看護大学健康科学講座
E-mail: sooki@ishikawa-nu.ac.jp

目　次

はじめに …… 1
アンケートの集計概要 …… 2
多胎児の年齢層別にみた 3 グループでの比較 …… 3
幼児健康度調査との比較 …… 6
21 世紀出生児縦断調査との比較 …… 11
国民生活基礎調査との比較（母親の健康と自覚症状）…… 16
自由記述のまとめ …… 18
おわりに …… 20
謝辞 …… 20

アンケートの集計概要

調査実施時期と協力多胎育児サークル地域

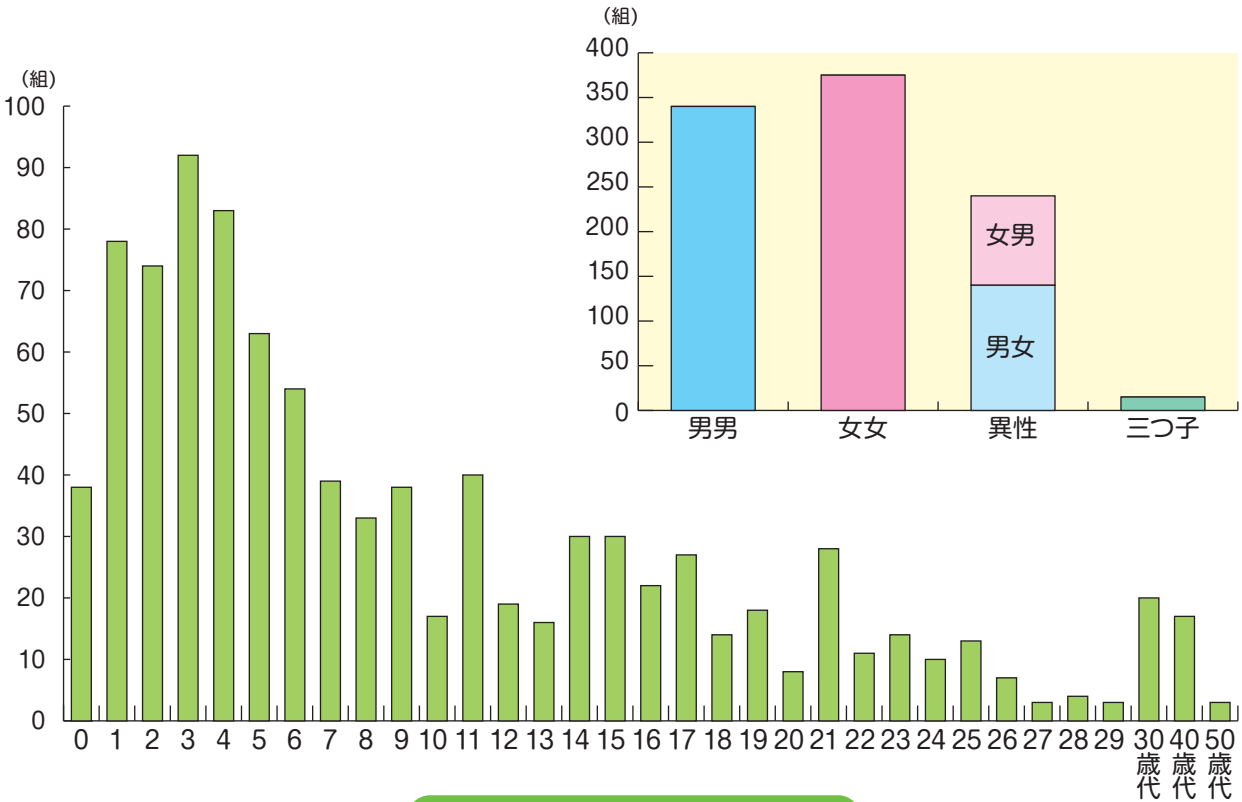
2010年1月～3月　：石川、青森、愛媛、岐阜、北九州、大阪、広島、兵庫、東京
2010年9月　　：ツインマザースクラブ（全国）、鳥取
2011年2月～4月　：京都

配付状況と返信率

配付部数	返信数	返信率
2,401	956	39.8%

【記入者】
母親　……950 (99.4%)
母親以外　…… 4 (0.4%)
無回答　…… 2 (0.2%)

ふたご　……　942 (98.5%)
三つ子　…… 14 (1.5%)



多胎児の年齢

多胎児の年齢層別にみた３グループでの比較

アンケート調査票別に「乳幼児群（0 歳～6 歳の未就学者)」、「小学生～高校生群（6 歳～18 歳の就学者)」「高校卒業以上群（18 歳以上)」の 3 つのグループに分けて分析しました。

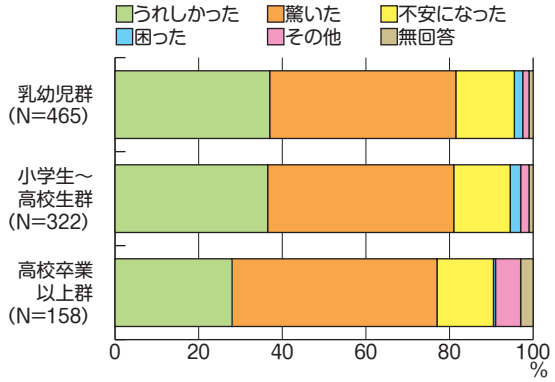
乳幼児群	468（49.0%）
小学生～高校生群	325（34.0%）
高校卒業以上群	158（16.5%）
年齢不明（生年月日未記入）	5（ 0.5%）

家族構成では、80%以上が核家族でした。きょうだい構成では、多胎のみの家庭が増加するとともに、最も多くみられました。

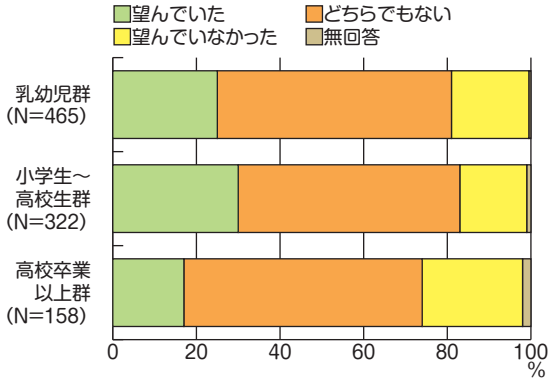
		乳幼児群（0～6歳の未就学）		小学生～高校生群（6～18歳）		高校卒業以上群（18歳以上）	
対象数(組)		468		325		158	
多胎児の生まれた年(年)	範囲	2003-2011		1991-2005		1958-1992	
家族構成	核家族(夫婦と子ども)	389	83.1%	261	80.3%	-	-
	拡大家族(3世代以上)	66	14.1%	56	17.2%	-	-
	その他	4	0.9%	5	1.5%	-	-
	不明	9	2.0%	3	0.9%	-	-
きょうだい構成	上にも下にもいる	8	1.7%	9	2.8%	2	1.3%
	上にいる(兄、姉)	128	27.4%	90	27.7%	52	32.9%
	下にいる(弟、妹)	38	8.1%	49	15.1%	32	20.3%
	多胎児のみ	289	61.8%	174	53.5%	68	43.0%
	不明	5	1.1%	3	0.9%	4	2.5%
多胎児出産時の母親の年齢(歳)	平均±標準偏差	33.1±4.0		32.0±4.1		28.8±3.5	
	範囲	22-44		21-43		21-39	
	不明	10		5		5	
多胎児出産時の父親の年齢(歳)	平均±標準偏差	35.6±5.6		34.4±4.9		32.3±4.2	
	範囲	24-67		21-49		24-44	
	不明	20		10		5	
妊娠週数(週)	平均±標準偏差	36.3±2.1		36.1±2.5		37.3±2.5	
	範囲	25-41		26-41		27-42	
	不明	8		6		6	
対象数(人)…三つ子を除く		922		640		312	
多胎児出産時の体重(g)	平均±標準偏差	2268.4±386.8		2274.4±440.6		2479.0±464.9	
	中央値	2300.0		2326.0		2500.0	
	範囲	651-3334		790-3410		966-3810	
	不明	19		23		9	
多胎児出産時の身長(cm)	平均±標準偏差	45.5±2.9		45.3±3.1		46.7±2.7	
	中央値	46.0		46.0		47.0	
	範囲	31.0-53.0		33.5-53.1		34.0-54.0	
	不明	93		69		73	
多胎児出産時の胸囲(cm)	平均±標準偏差	28.7±2.2		28.7±2.3		29.9±2.3	
	中央値	29.0		29.0		30.0	
	範囲	18.0-34.5		19.0-35.0		21.1-34.5	
	不明	117		96		100	
多胎児出産時の頭囲(cm)	平均±標準偏差	32.0±1.8		31.9±1.9		32.6±1.7	
	中央値	32.0		32.1		33.0	
	範囲	22.4-36.4		23.0-36.3		24.7-36.5	
	不明	115		89		96	

妊娠時に関する質問の分析は、回答者が母親のもので行いました。

多胎妊娠と分かった時の気持ちは、どの群でも「うれしかった」よりも「驚いた」と「不安になった」の合計が半数以上を占めました。多胎妊娠について、乳幼児群と小学生～高校生群では「望んでいた」が 25%いましたが、高校卒業以上群では「望んでいなかった」の方が多く 25%でした。多胎妊娠に対する希望は不妊治療の有無と強く関係していました。不妊治療の場合には多胎妊娠を希望する割合が高くなりました。

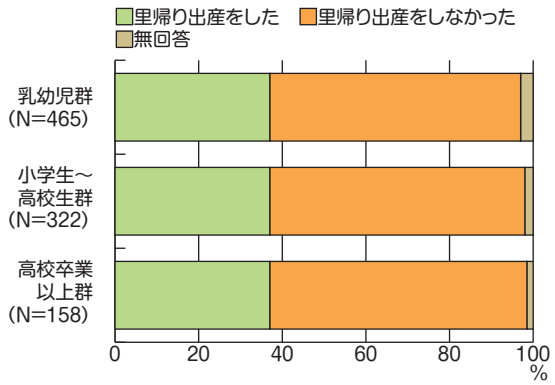


妊娠が分かった時の気持ち

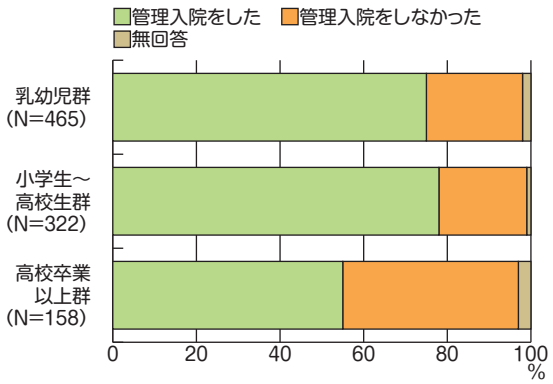


多胎妊娠を望んでいたか

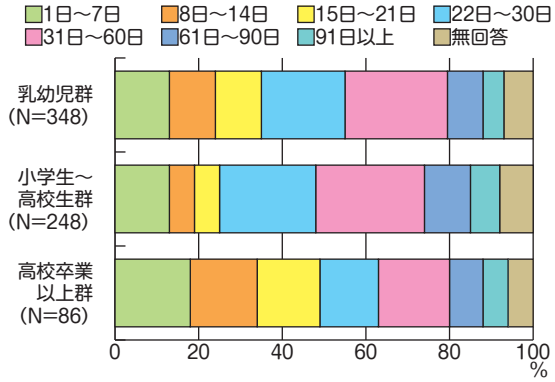
里帰り出産は 36%であり、管理入院は高校卒業以上群で 50%以上、それ以外の群では、70%以上が経験していました。管理入院の期間は約 40%が 1 ヵ月以上でした。



里帰り出産の有無



管理入院の有無

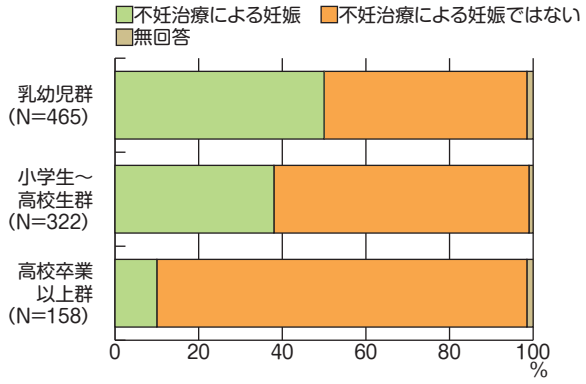


	乳幼児群	小学生～高校生群	高校卒業以上群
対象数	325	231	81
平均±標準偏差	37.5±31.8	44.2±37.9	34.3±34.0
中央値	30.0	33.0	29.0
範　囲	1-210	1-226	1-160

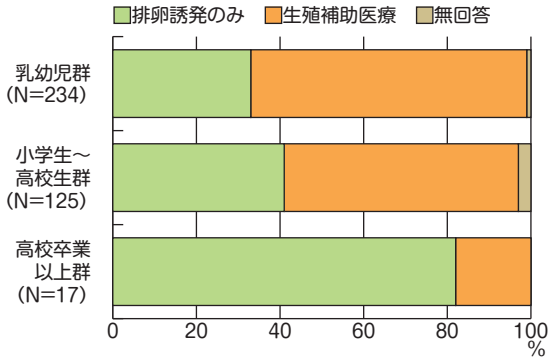
（＊無回答を除く）

管理入院の日数

不妊治療による妊娠は児の出生年により大きく違いました。乳幼児群では約半数が不妊治療であり、その 68%が生殖補助医療でした。これは、大木が行った全国データからの推計とほぼ一致します。現在、日本において生殖補助医療で生まれる子は 3%近くであり、決して稀な出来事ではありません。

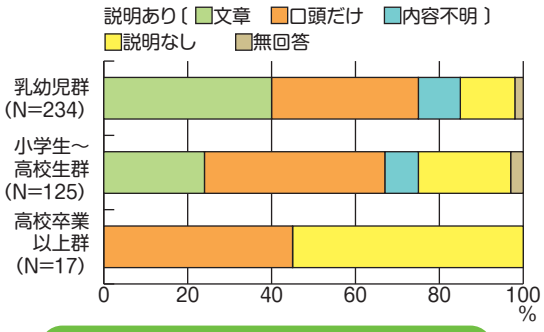


不妊治療の有無



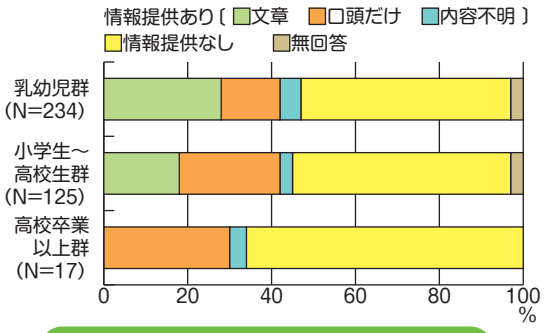
不妊治療の内容

不妊治療の際の多胎妊娠の可能性についての説明は、高校卒業以上群では半数以上説明がありませんでしたが、乳幼児群では 80%以上が説明を受けていました。また、年代とともに口頭だけの説明から文章による説明が増えていきました。



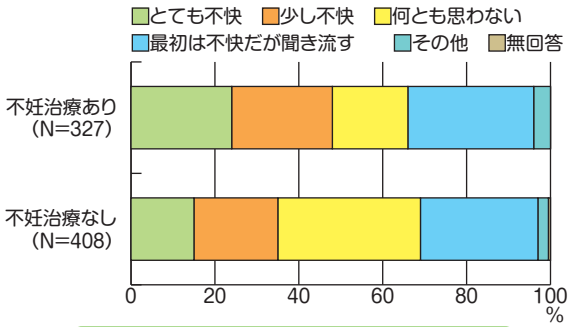
多胎妊娠の可能性についての説明

多胎妊娠や多胎育児に関する情報提供は半数以上で行われていませんでした。

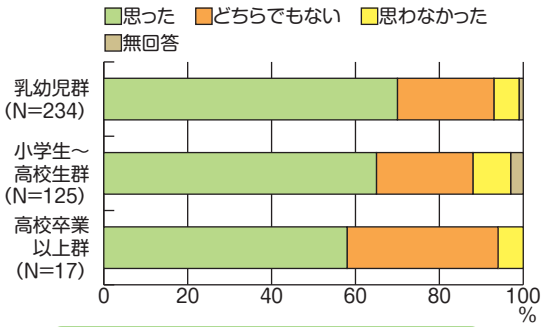


多胎妊娠・育児に関する情報提供

多胎妊娠をしてもいいと思ったかの問いに対しては、「いいと思わなかった」が全体の 1 割以下でした。



不妊治療の有無と不妊治療を受けたかどうか聞かれた時の気持ち

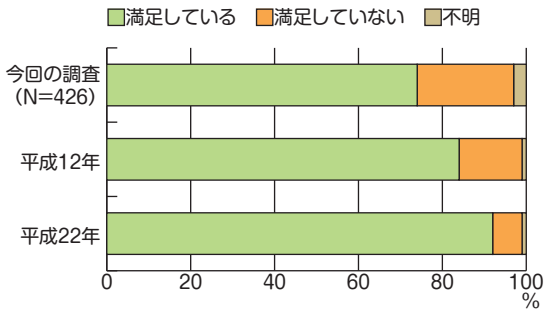


多胎妊娠してもいいと思いましたか

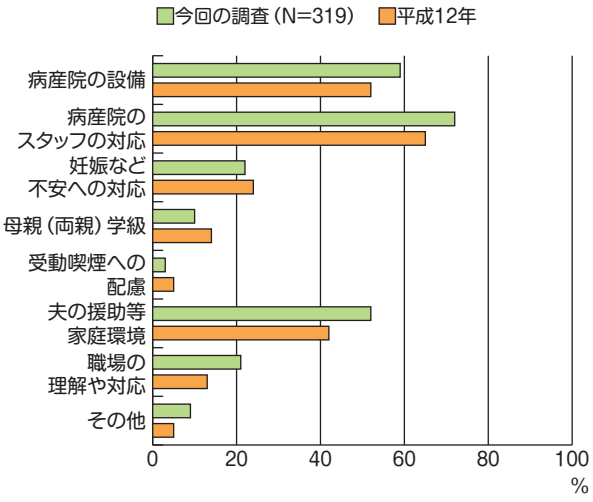
幼児健康度調査との比較

幼児健康度調査は、社団法人日本小児保健協会が、幼児の心身の健康や日常生活及び発達の状態の実態を把握し、今後の乳幼児健康診査や保健指導、育児相談に役立てることを目的に実施している大規模調査です。昭和 55 年度、平成 2 年度、平成 12 年度、平成 22 年度の 4 回の全国調査が行われています。対象は 1 歳から就学前 7 歳未満の幼児です。対象児の年齢は、1 歳（1 歳以上－1 歳 6 ヵ月未満）、1 歳 6 ヵ月（1 歳 6 ヵ月以上－2 歳未満）、2 歳（2 歳以上－3 歳未満）、3 歳（3 歳以上－4 歳未満）、4 歳（4 歳以上－5 歳未満）、5-6 歳（5 歳以上－7 歳未満：未就学児）と区別されているので、多胎育児家庭を対象とした今回の調査もその年齢区分に合わせて集計しました。

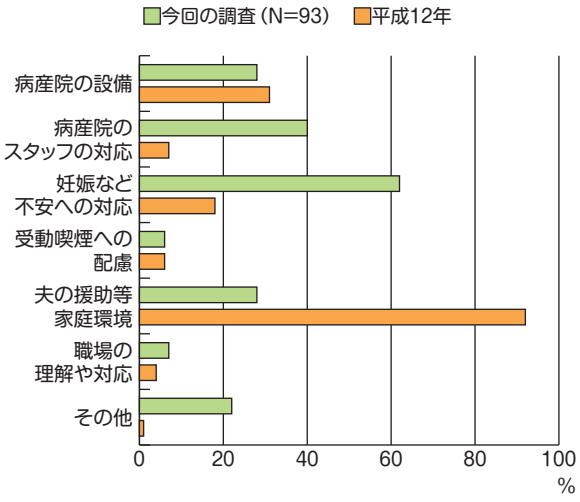
妊娠出産時の状況に関して、幼児健康度調査では「満足している」人が平成 12 年から平成 22 年で 84%→92%、「満足していない」人は 14%→7%と改善されていますが、多胎育児家庭では、「満足している」人は 75%程度でした。満足している理由の項目はあまり違いがありませんでした。しかし、満足していない理由では、多胎育児家庭では「妊娠・出産・育児についての不安への対応がない」が 60%を超えていました。幼児健康度調査で多かった「夫の援助など家庭環境」は 30%弱でした。夫の援助を比較的得られやすいのが多胎育児の一つの特徴であり、それだけ大変な育児だと言えます。



妊娠・出産時の状況（1～6歳）

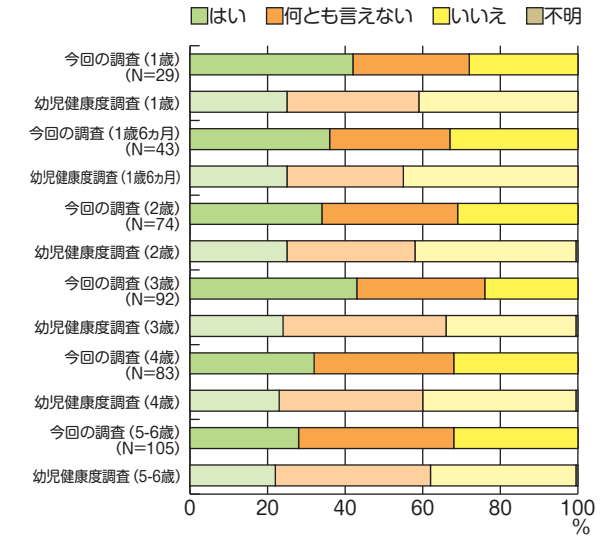


満足している理由（複数回答）

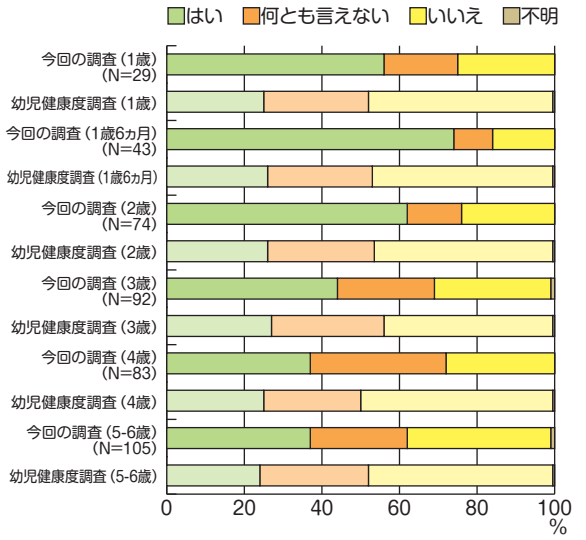


満足していない理由（複数回答）

「育児に自信がもてないことがありますか？」「育児に困難を感じることがありますか？」という問いに対して、多胎育児家庭では育児の困難を示す回答の割合が顕著に高くなっていました（幼児健康度調査は平成 22 年の値）。



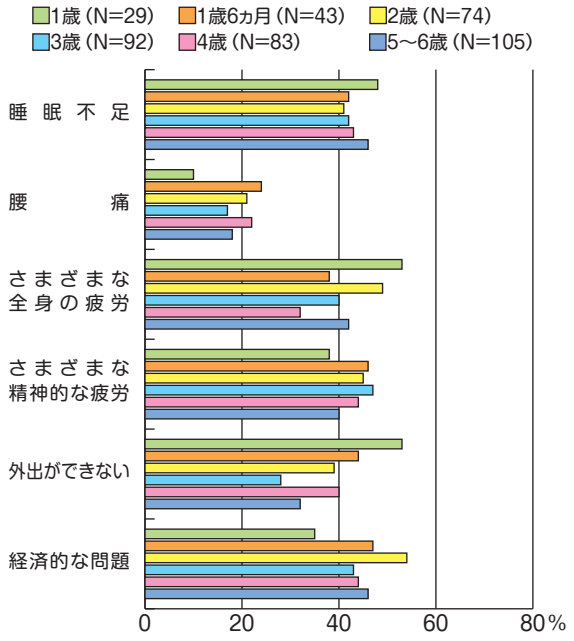
育児に自信がもてないことがありますか？

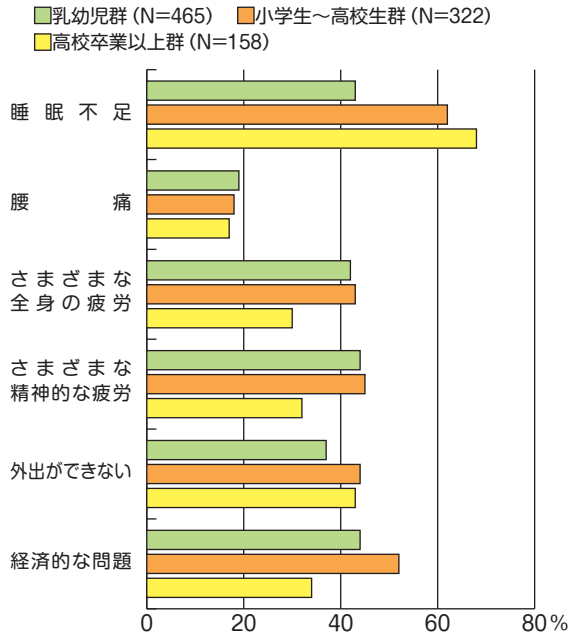


育児に困難を感じることがありますか？

「ふたごの育児の大変さは主にどのような点だと思いますか？」という問いに対しては、「睡眠不足」を挙げている人が多くみられました。「疲労」や「外出できない」などは年齢が上がるにつれ減少傾向にある反面、「経済的な問題」は就学期に多く挙げられていました。

乳幼児群以上のグループでは、乳幼児期を振り返り「睡眠不足」の大変さが強く印象に残っているようでした。

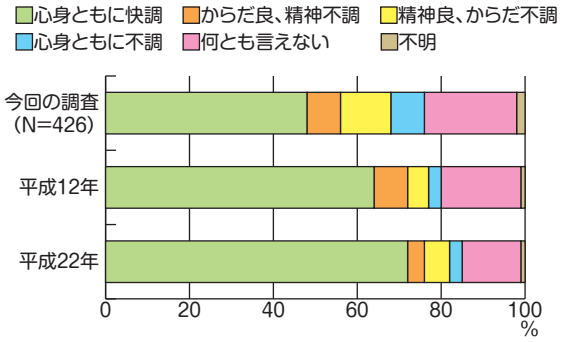




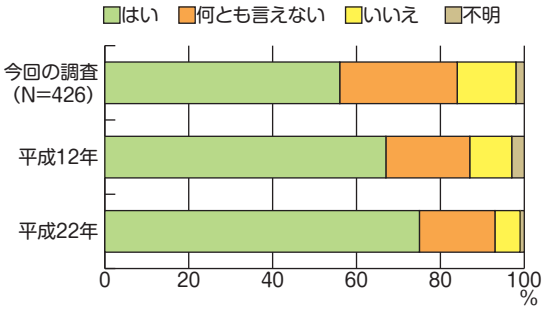
ふたご育児で大変なこと（複数回答）

母親の心身の健康状態についてみると、「快調」という母親は幼児健康度調査では増えていますが、多胎育児家庭ではこれらよりも低い割合でした。

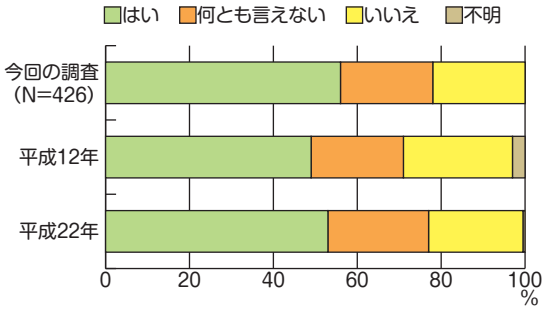
父親の育児参加は、多胎育児家庭の方が高率にみられました。また、子どもが小さいときの方が父親が育児に参加する割合が高くなっていました。



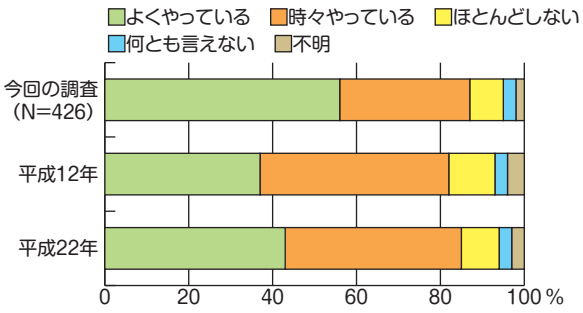
母親の心身の健康状態（1～6歳）



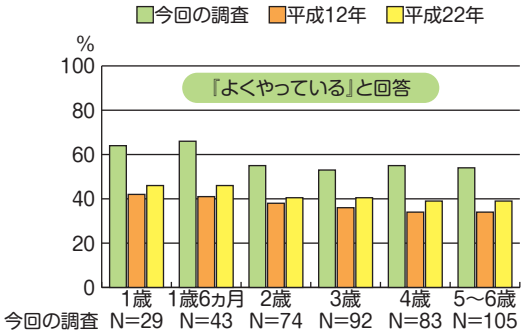
ゆっくりとした気分で子どもと過ごせる時間があるか（1～6歳）



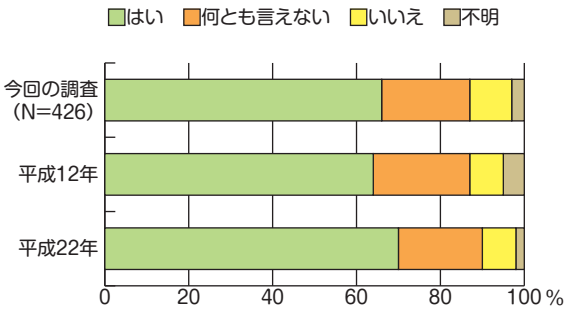
自分のために使える時間をもてているか（1～6歳）



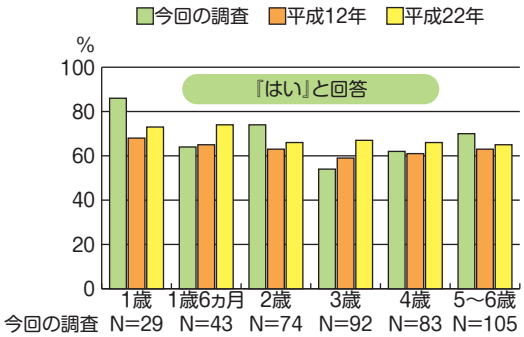
【 1～6歳 】



父親は育児に参加しますか

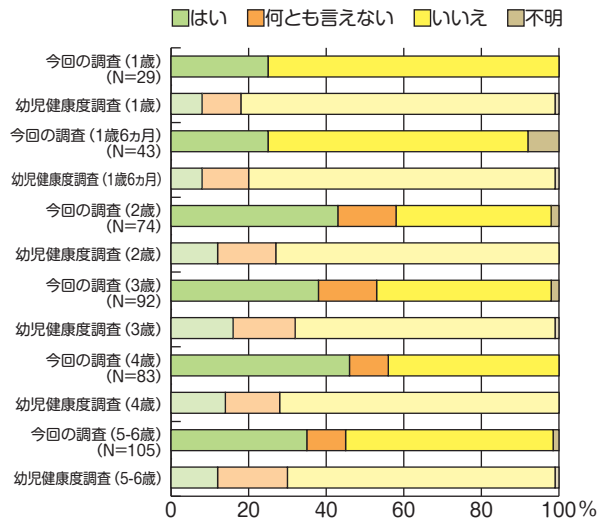


【 1～6歳 】

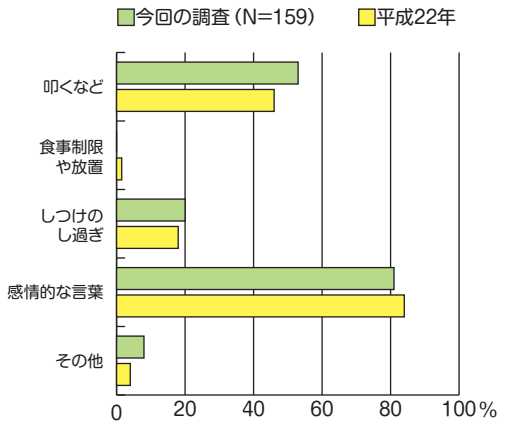


父親は母親の相談相手、精神的支えになっていますか

「子どもを虐待しているのではないかと思うことがありますか？」という問いに対しては、3〜4 割の親が虐待しているかもしれないと感じながら育児をしていることがわかりました。これは、幼児健康度調査（平成 22 年の値）による結果よりも顕著に高い割合でした（およそ 2 倍）。幼児健康度調査とは調査の時期や方法などが若干異なりますが、多胎育児で心理的負担が高まることが浮き彫りになったことには間違えありません。虐待しているのではないかと思っている内容については、ほとんどが幼児健康度調査と同じで「感情的な言葉」が 8 割、「叩くなど」が 5 割程度でした。



子どもを虐待しているのではないかと思うことがありますか？



虐待内容（複数回答）

「虐待感情、単胎児の２倍に」について…
虐待感情と虐待は意味が違います

今回の調査は、主として多胎育児に関する行政資料や研究データになることを目的として実施しています。そのため、一般家庭に対して過去に行われた大規模な調査と同じ質問項目を使っています。質問する表現を変えてしまうと正しい比較が出来なくなるからです。「お子さんを虐待しているのではないかと思うことがありますか」と言う質問項目の「微妙な言い回し」は、社団法人日本小児保健協会が行っている幼児健康度調査と言う大規模な調査と同一のものです。もちろん今回の調査は多胎育児全般の広範な調査ですから、この項目だけを聞いているわけではありません。

調査結果の一部は、日本公衆衛生学会で公表しました。そのため、地元の北陸中日新聞での掲載から始まり、その後、東京新聞、産経新聞、朝日新聞などへも紹介されました。Yahoo!ニュースでネット上にも流れましたので、ご覧になった方も多いかと思います。それだけ、インパクトの大きな結果だったと言えるでしょう。

さて、今回の結果をどのように考えたらよいでしょう。おそらく、ある程度は予想された結果ではないかと思います。「虐待をしているのでは…」と感じたと言う多胎育児者の経験談は数多くありますし、小規模な調査でしたらこれまでにも実施されています。「わざわざ調査するまでもない結果」に見えても、やはり、多くの方に多胎育児の置かれている現状を客観的なデータで知っていただかなければ、支援の必要性は伝わらないでしょうし、広がりも見せないと思います。その反面、一端活字になったものは独り歩きをしていきます。どれだけ正確な記述をしても、言

葉の捉え方は人それぞれです。中には多胎児家庭が虐待の多い家庭だと言う短絡的な考え方をする人もいると思います。しかし、ネット上での様々な反応を見る限り、そうした捉え方をする人は少数みたいです。大半の人は、結果から「育児は1人の子でも大変なので、多胎育児はやはりストレスが高いのだろう」と考えるのではないでしょうか。いろいろな取材を受ける際には調査結果の解釈に誤解が生じることがないように強調しましたし、専門職や育児支援者との間でもディスカッションをしました。マスコミに掲載されることによるデメリットが仮にあったとしても、トータルでは多胎育児支援の今後にとってメリットの方がはるかに大きいと考えています。

「多胎児家庭で2倍」と言う点だけが強調されているみたいですが、「多胎児家庭の4割」と言う結果を同時に考えてみるべきでしょう。3人に1人以上のお母さんは、多かれ少なかれ、「自分は虐待をしているのでは…」という不安や罪悪感、意識を持っていると言えます。これは、多胎育児ではこうした感情を持つことは決してまれなことではなく、多くの親が感じていることなのだと言うことです。それを知るだけでも、気持ちが少しは楽になる人がいるかも知れません。

“虐待"という言葉のイメージは人によって差がでてくると思われます。最近では児童虐待のニュースが多く、それも生命に危険を与えるほどのものがセンセーショナルに報道されています。しかし、軽い程度のものや感情的なものまで含めると「虐待をしているのでは…」という意識は、非常に広い意味で解釈できると思います。人によっては小さなことでも気にしますし、全くそうしたことを感じない人もいるでしょう。これは、多胎育児に限った話ではなく、単胎の育児であっても同じことです。多胎育児であれば、例えば、思わず叩いてしまった、十分に時間をかけて相手をしてあげられなかった、二人を同じ様に育てることが出来なかった、などなどいろいろな状況が考えられると思います。こうしたことを、もう少し話し合っていく必要もあるのではないでしょうか。今回の調査結果が、そうしたきっかけになることを期待しています。

この質問では､「虐待をしているのでは…」の内容を具体的な選択肢で答えてもらっています。また、育児不安や母親の心身状態の悪さは虐待へのハイリスク要因となるので、それらの質問項目との関係も含めた分析が必要になります。

双子ママ 負担ずしり

虐待感情、単胎児の2倍に

県立看護大教授 初の全国調査

北陸中日新聞

「虐待しているのでは」

双子育児の母 不安大

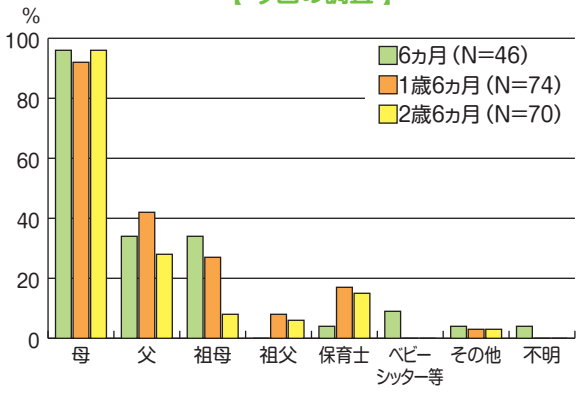
かさむ費用…支援を

21世紀出生児縦断調査との比較

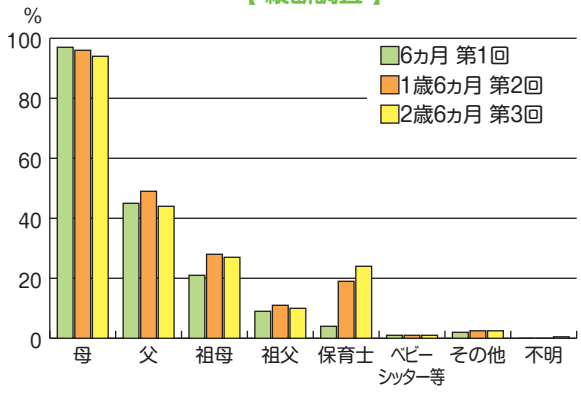
21 世紀出生児縦断調査は、厚生労働省が、同一個人を長年にわたって追跡する縦断調査として、平成 13 年度から実施している統計調査です。21 世紀の初年に出生した児の実態及び経年変化の状況を継続的に観察することにより、少子化対策等の施策の企画立案、実施等のための基礎資料を得ることを目的に実施している大規模調査です。平成 13 年の 1 月・7 月に出生した子を対象に、第 1 回は月齢 6 ヵ月の時期、その後毎年行われ第 10 回（平成 23 年、10 歳）まで行われています。新たに平成 22 年出生児を対象とした縦断調査も開始されました。多胎育児家庭を対象とした今回の調査は同じ集団を長期にわたって追跡する調査ではなく、年月齢によって該当する調査対象が異なる横断調査（断面調査）ですから、縦断調査とは調査方法が異なっています。多胎育児の特徴を推測することを目的として、両調査を比較することにしました。この点に注意して結果を解釈する必要があります。対象の年月齢と全く同じにすると今回の調査では各年月齢の例数が少なくなるので±3 ヵ月の幅を持たせた年齢区分にしています（6 ヵ月児の場合は 3 ヵ月～9 ヵ月までの児を含む）。

調査対象の児のふだんの保育者をみると、どちらの調査でも母が 90%以上となっていました。縦断調査の方が父の割合が高く示されています。ただし、第 1 回縦断調査の結果では、「きょうだい数が多くなると父の割合は下がっている」と報告されています。また、祖父母と同居している場合では、ふだんの保育者は父より祖母になっている割合が高いとも報告されています。多胎育児家庭の場合に生後半年までは祖母やベビーシッターなどの協力も必要なのかもしれません。

【 今回の調査 】

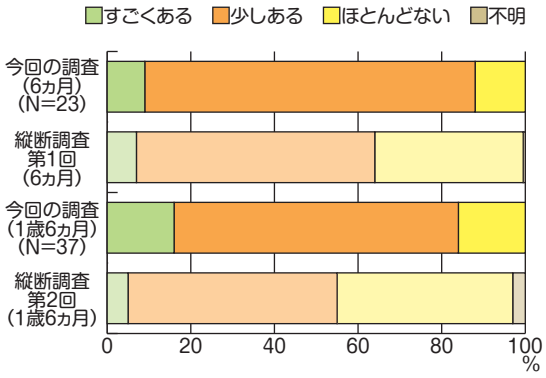


【 縦断調査 】



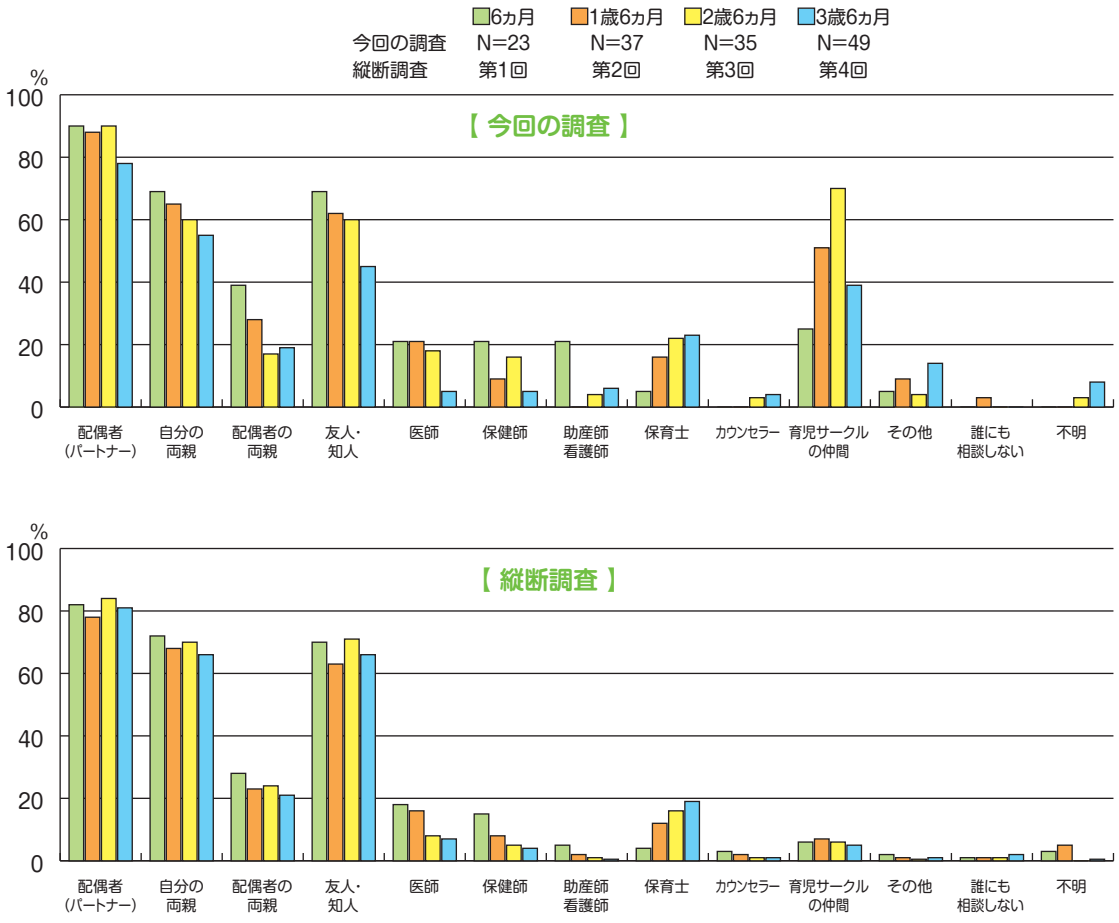
保育者（複数回答）

「子育てに不安や悩みがありますか？」という問いでは、生後６ヵ月あたりでは「すごくある」という回答に多胎育児家庭と縦断調査の間で大きな違いは見られませんでした。しかし、1歳６ヵ月あたりでは多胎育児家庭において顕著に育児不安が表れています。



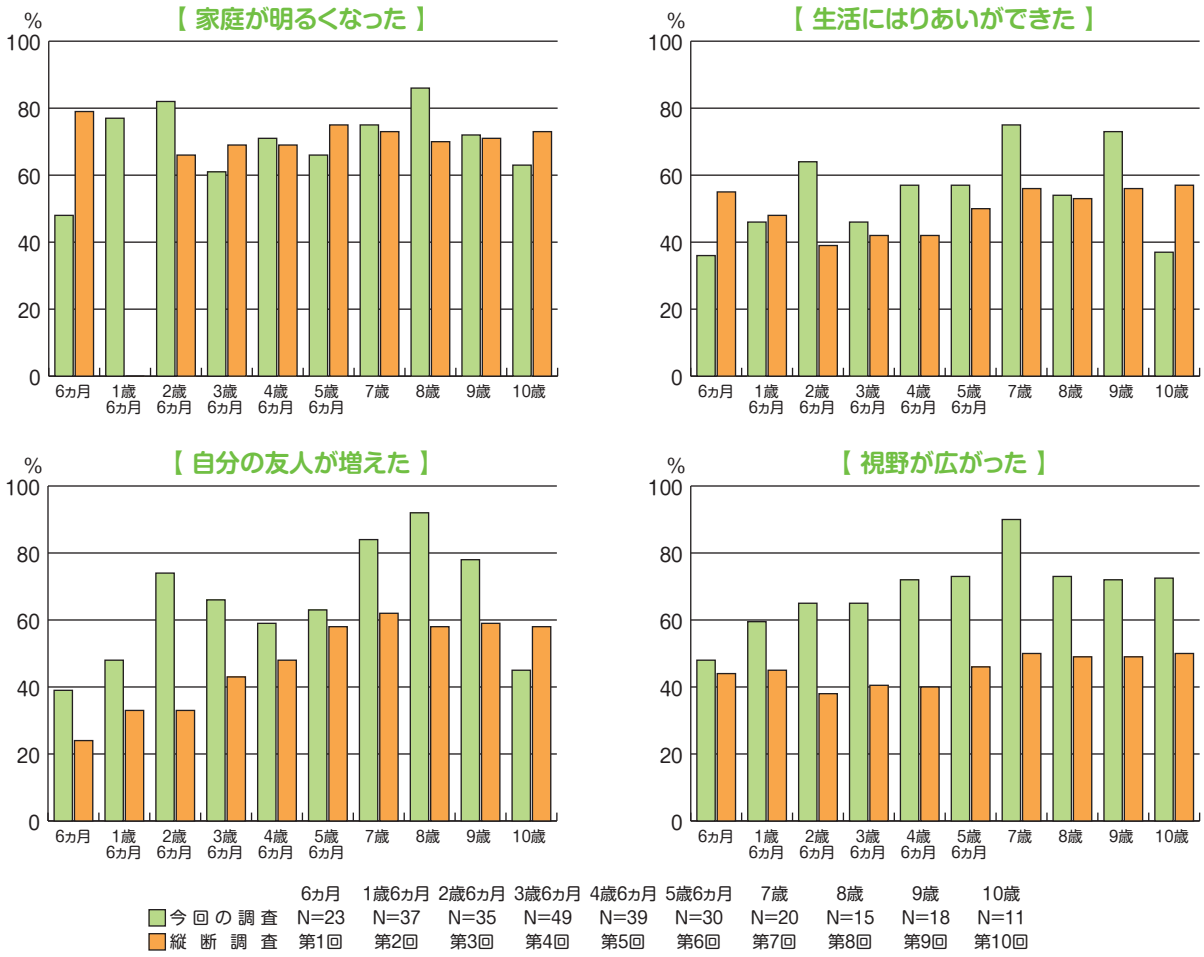
子育ての不安や悩みの有無

「子育てについての相談相手」は、いずれの調査でも配偶者（パートナー）、自分の両親、友人・知人などが多くみられました。多胎育児家庭の場合には、育児サークルの仲間という回答が多いのが大きな特徴です。もちろん、今回の調査対象が多胎育児サークルに所属していた人が大半であることは念頭に入れておかなければいけないでしょう。しかし、多胎育児の場合には、通常の育児にも増して同じ経験をした人からのアドバイスが重要だと言えます。これは、育児のノウハウだけではなく、精神的な悩みに対するサポートにもつながると思われます。



子育てについての相談相手（複数回答）

「子どもをもってよかったと思うことは何ですか？」という問いに対して、「よかったと思うことは特にない」と回答した人はほとんどいませんでした。よかったと思う内容は、どちらの調査とも「家庭が明るくなった」と回答する人が多くみられました。多胎育児家庭では、子育てを通じて「自分の友人が増えた」「自分の視野が広がった」と回答する人が多い特徴がありました。多胎育児に限ったことではないと思いますが、困難を乗り越えていくことによって、周囲とのつながりを増やしていったり（周囲とのつながりがなければ困難を乗り越えにくいという状況もあると思います）、新たな世界を知ることで視野が広がったと感じることがあるのではないでしょうか。例えば、育児の経験談を大勢の人の前で話したり、育児サークルのリーダーや幹事になるなど全く予想もしていなかった人が多いのではないでしょうか。



子どもをもってよかったと思うこと（複数回答）

「子どもをもって負担に思うことは何ですか？」という問いに対して、縦断調査では「負担に思うことは特にない」と回答する人が 20%前後いましたが、多胎育児家庭では 10%以下でした。多胎育児家庭では「子育てによる身体の疲れが大きい」「子育てで出費がかさむ」と回答する人が多く見られました。

子どもをもって負担に思うこと（複数回答）

多胎育児が、身体的な負担や精神的な負担だけではなく、経済的・社会的にも負担の大きな育児であることが浮き彫りになったと言えます。育児に関する出費を月当たりの金額でみると、多胎育児では単胎育児の 2 倍よりも若干低めになります。これは、多胎育児の場合には、出費を抑えるための様々な工夫をしているためだと思われます。ただし、現実には二人以上を同時に育てているので、出費の総額が大きな負担になっていることは間違いないと思われます。

これからの多胎育児支援

多胎育児の難しさを理解できるのは他のだれでもなく、多胎育児経験者です。当事者どうしが、お互いに共感をもって集まる多胎育児サークルのようなグループをセルフヘルプグループと呼んでおり、当事者の悩みや負担を解決する上で非常に有効です。多胎育児特有の問題については、同じように多胎児を育ててきた仲間（ピア）からの「わかるよ、大変だよね」といった共感の言葉が、何よりも勇気づけとなります。また、多胎妊娠中から地域での子育てまでの長いスパンでとらえた切れ目のない支援が大きな鍵となります。しかし、当事者を中心とした組織は必ずしも安定した活動が継続できるとは限りません。そのような場合に、多胎育児サークルどうしのつながりとこれを支えるより大きなネットワークや、専門家の間で連携のとれた組織的で継続的な支援が有効です。こうした連携の動きは確実に進んでいます。

「多胎児家庭にやさしい社会は、全ての人にやさしい」これは2010年（平成22年）2月22日に設立した日本多胎支援協会（Japan Multiple Births Association: JAMBA）が掲げているスローガンです。ある局面において一定の支援を必要とする当事者たちに適切なアプローチが提供される社会というものが、全ての人にとってやさしい暮らしやすい社会であることを意味しています。

多胎育児支援にかかわるお互いが良い結果を得ることを目標に、期限を付けて継続的に活動に取り組むことが大切です。そのためには、明確なビジョンを持つことが大事です。また、小さなことでも具体的に行動に移す必要があります。

現場である当事者や多胎育児サークルに密接した課題を見る目（虫の目）や大局的・包括的・組織的に多胎育児支援を考える目（鳥の目）だけでなく、時の流れを見る目（魚の目）も併せ持つことが必要でしょう。多胎育児支援がこれほど注目されたことは今までにありません。この好機を逃さないようにしたいものです。地道に支援活動を継続することで着実に何かが変わっていくものです。その成果は段階的に得られるとは限らず、突然現れることも少なくありません。

多胎児家庭が地域で孤立せず、「ふたご・みつごの育児は楽しい」「ふたご・みつごを産んでよかった」「ふたご・みつごに生まれてよかった」と思えるような支援が提供できるように、当事者を中心としたネットワーク作りと各専門分野における研究および専門家の育成が求められています。

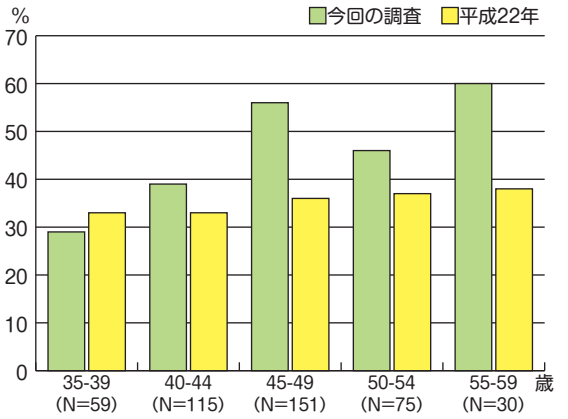
出典：大木秀一、彦 聖美：多胎出産の動向とこれからの多胎育児支援．
チャイルドヘルス，13（10）：4-7，2010. を改変

国民生活基礎調査との比較（母親の健康と自覚症状）

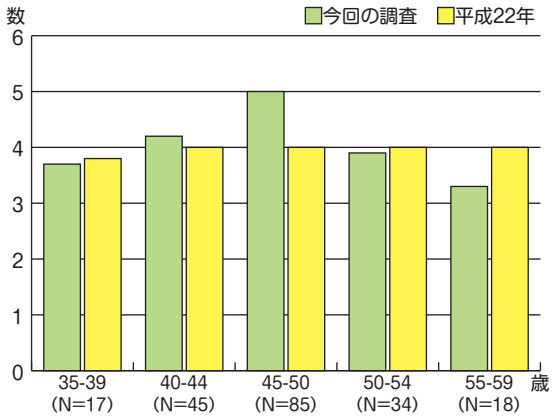
国民生活基礎調査は、厚生労働省が、保健、医療、福祉、年金、所得等国民生活の基礎的事項を調査し、厚生労働行政の企画及び運営に必要な基礎資料を得るとともに、各種調査の調査客体を抽出するための親標本を設定することを目的に実施している大規模調査です。世帯票、健康票、介護票、所得票、貯蓄票と調査事項がわかれていますが、自覚症状など健康に関する質問を比較しました。調査は毎年行われていますが、健康票は 3 年ごとの調査になります。

回答者が母親のものと平成 22 年女性の数値を比較しました。年齢はアンケート調査時の年齢で、5 歳ごとに区分しました。比較的人数の多い 35～59 歳を分析しました。

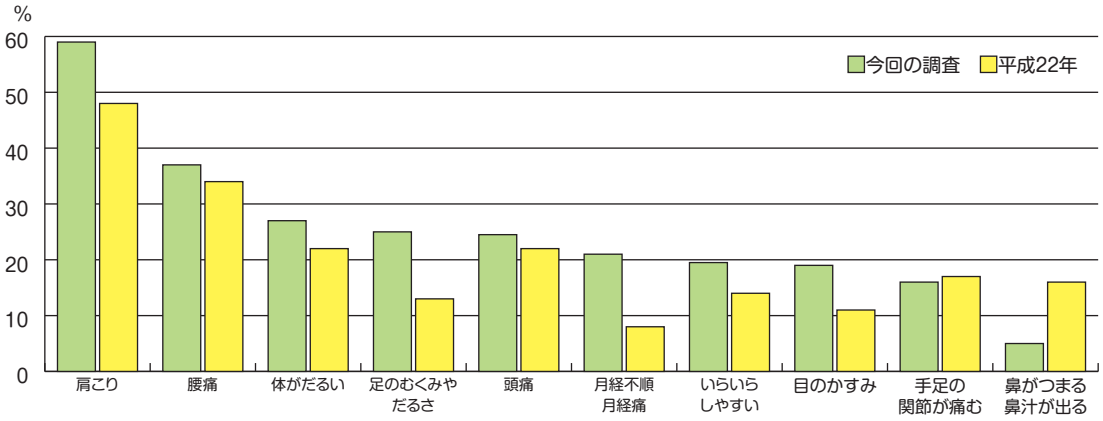
多胎育児を経験した女性の長期的な健康問題はほとんど知られていません。その意味で、今回の調査は貴重なデータであると言えます。



自覚症状がある



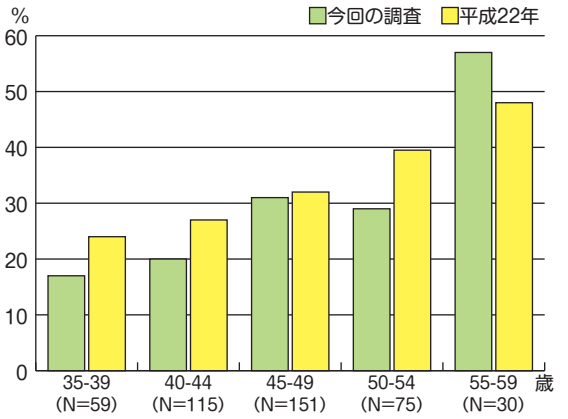
平均症状数



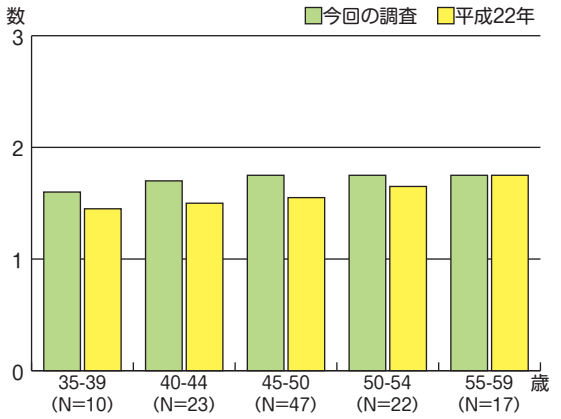
自覚症状の多いもの（複数回答）

「ここ数日、病気やけがなどで体の具合の悪いところ（自覚症状）がある」と回答した人の割合は国民生活基礎調査よりも多胎育児家庭において高い割合でした。症状別（35～59 歳の合計）にみると「肩こり」「腰痛」が多く、国民生活基礎調査と同じ傾向でした。

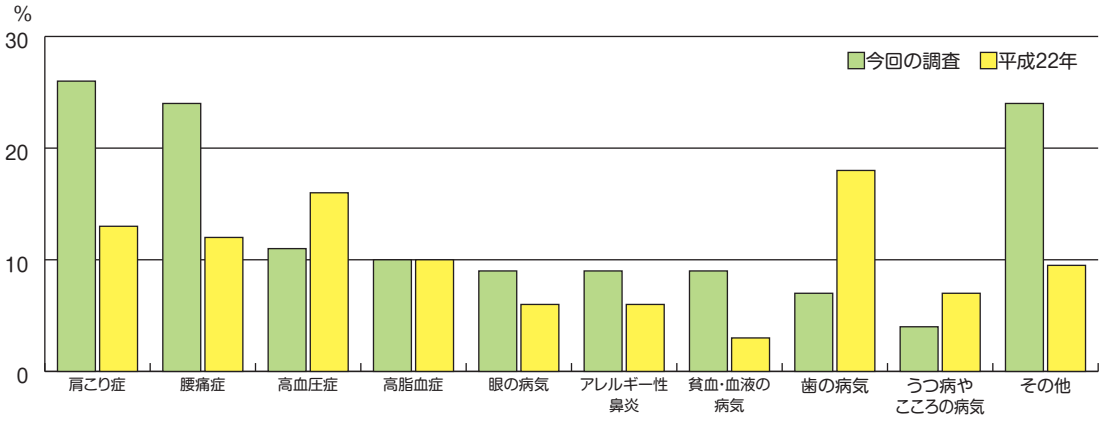
「現在、病気やけがなどで病院や診療所、あんま・はり・きゅう・柔道整復師に通っている（通院）」と回答した人の割合は国民生活基礎調査と同じくらいの割合でした。傷病別（35～59 歳の合計）にみると「肩こり症」「腰痛症」が高率に見られました。多胎育児が通常の育児と比較して、身体的な負担も大きな育児であることがわかります。肩こりや腰痛ほど高い頻度ではありませんが、月経不順・月経痛の頻度が国民生活基礎調査と比較して 2 倍以上になっています。しかも、通院においてもやはり貧血が国民生活基礎調査の 2 倍以上になっています。多胎の妊娠出産において貧血が多発することは良く知られています。その影響がどのくらい続くのかなどは、今後詳しく調べていく必要があります。



通院している



平均傷病数



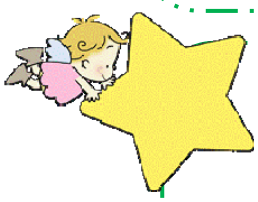
通院傷病の多いもの（複数回答）

自由記述のまとめ

日頃感じていることやこれまでの多胎妊娠中・育児中に感じたことを書いていただきました。各間で多かったご意見を抜粋してまとめました。これまで、調査研究されることがほとんどなかった、多胎育児ならではの楽しさや喜びについても多くの方がご意見を書いてくださいました。

医療・行政機関から欲しかったサポートや情報

1．妊娠中からの情報やアドバイス
2．母親が心身ともに休める場所
3．職場や家族に対する周知・理解
4．健診や病院などへの付き添い
5．医療費の補助



医療・行政機関への希望

1．多胎用の妊婦（両親）教室・乳幼児健診
2．多胎児家庭用の駐車場
3．インターネットやFAXによる書類受付
4．利用者に配慮した建物の構造

嫌な思いをしたこと

1．配慮のない発言・態度（どちらが上？、不妊治療した？、年子の方が楽 など）
2．好奇の眼で見られる（母児ともに）

不安を感じたこと

1．無事に出産できるか、無事に育てられるか
2．愛情が偏っていないか
3．一人が病気や障がいになった場合
4．多胎育児に関する情報不足

困ったこと

1．二人を同時に育てる難しさ（同時に泣かれたとき、二人が別々に行動するとき、お風呂の入れ方など）
2．外出が困難、一人が病気になったとき
3．妊娠経過・管理入院・身体的疲労・精神的疲労など
4．他者の協力が得られないとき、得られても多胎育児を知らない場合

本当に救われた、助かったと思った瞬間

1．多胎育児の大変さを知っている人からの共感や励まし
（もう少し年齢が上になったら楽になるよ、育児書通りにはできないよなど）
2．多胎育児は選ばれた人たちだけが経験できることだと言われたとき
3．子どもたちの笑顔・寝顔
4．多胎育児サークルとの出会い、サークルの仲間との交流

多胎育児をしていてよかったと思うこと、嬉しかったこと

1．いろいろな人から「かわいいね」と声をかけられる
2．二人で仲良く遊んだり、助け合うようになっていくのを見ているとき
3．同時期に二人の子どもの成長を楽しめ、個性の違いを発見できる
4．急に家族が増えて家庭が明るくなった
5．同じ苦労をした仲間に数多く出会えた

育児を楽しいものにする方法

1．必ず楽になる時が来る。マイナスなことは忘れる
2．「助けられ上手」になって。上手に手を抜くことも大切
3．頑張りすぎない

これから多胎の妊娠・出産・育児をするご家庭に伝えたいこと

1．友人が増えた。子どもたちからパワーをもらった。貴重な経験ができる
2．育児の大変さは４倍だけど、成長するにつれて楽しみも幸せもそれ以上になる
3．自分自身も人間的に成長できた。育児で身に付けた精神力が今後も生かされる

おわりに

このアンケート調査の分析結果は、少しずつ学会などで公表しています。

2010 年の学会（第 69 回日本公衆衛生学会：東京：2010 年 10 月 27 日）では、0～6 歳の多胎児（312 組）を対象に分析した結果を発表しました。また、2011 年の学会（第 70 回日本公衆衛生学会：秋田：2011 年 10 月 19 日）では、0～6 歳の多胎児（465 組）を対象に分析した結果を発表しました。2012 年の学会（第 71 回日本公衆衛生学会：山口：2012 年 10 月 25 日）では、0～6 歳の未就学者（乳幼児群：N=465）と、6～18 歳の就学者（学童以降群：N=322）について分析した結果を発表しました。

今回、ご協力いただきました皆様方への結果報告としてこの報告書を作成しました。紙面の都合で、分析結果の解釈の仕方などで説明不足な点もあるかと思います。特に、自由記述については非常に多くのコメントをいただきましたが、十分に紹介することができませんでした。改めてまとめ直してみたいと思っています。また、アンケート調査が無記名で行われたため、大多数の方には個人的に報告書をお送りすることはできません。多胎育児サークルなどを通じて多くの方にこの報告書をお読みいただければと思います。

この調査結果が、多胎育児家庭の現状と今後の支援の必要性を行政機関や医療機関に訴える際の重要な根拠になれば幸いです。

今回のアンケートデータはまだまだ分析可能な貴重な情報です。今後もこのデータを有効に活用し、多胎育児関係者の皆様のお役に立てるような研究を進めていきたいと思っております。

謝　辞

今回の調査にご協力いただきました全国の多胎育児家庭の皆様、ツインマザースクラブをはじめ地域での多胎育児サークル活動を行っている皆様にお礼申し上げます。分析を行うにあたり、石川県立看護大学の彦 聖美講師、また、森みちよさんをはじめアルバイトの方々にデータ入力作業やデータ整理をお手伝いいただきました。お礼申し上げます。データ集計及び図表の作成において、山梨大学の大間敏美さんに多大なご協力をいただきました。

本冊子の刊行に関する助成

・平成21年度特別助成 独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成
（「多胎育児支援の充実と普及啓発活動事業」）
・平成24年度石川県立看護大学共同研究助成（「多胎児（ふたご）の妊娠期・出生後初期の各種要因が18歳までの成長と発達に与える影響の総合的分析」）

多胎児家庭の育児に関するアンケート調査
分析結果報告書
2013.2.22